

1 コミュニティのポンチ絵とは

- 1) コミュニティについての政策図書に登場する、絵的なイメージ。
- 2) ポンチ絵とはそもそも・・・（ジャパン・パンチ→ポンチ絵→漫画）
- 3) ポンチ絵を軸にして、現代のコミュニティ計画における計画の役割などを考えたい。
- 4) 多用されているわけではなく、将来の可能性を考えたい。

2 これは計画なのか、挿絵なのか

- 1) 政治経済の違いにおける計画の意味の違い
エスピンアンデルセンの福祉国家／福祉レジームの類型
→都市計画のレジームの類型（饗庭 2003）
多元主義重視型（都市計画1968年法、革新自治体でも100人会議など）
代議制重視型（主に革新自治体、三鷹、目黒、時折モチーフになる）
協働重視型（1980年代のまちづくり→1998年のNPO法以降）
自由競争重視（1998年のNPO法以降→）
- 2) この25年の都市計画は協働重視型から自由競争重視型のあたりをふらふらとしながら、社会主義っぽい時代から新自由主義の時代へと転換してきた。自由主義、保守主義、社会民主主義のどのあたりに落ち着くのだろうか。
- 3) 計画の意味、描き方は時代にあわせて変化してきた。森村道美（1998）によると
 - ・第1期「需応供給型」は高度経済成長を背景に、都市基盤の整備や区域区分に関わる計画課題を中心に扱ったもので、長期的な人口フレームを導入してそれまでバラバラだった計画をつなぎ合わせたもの
 - ・第2期「問題解決型」は公害問題などへの対応を明確にするために科学的な基準を導入して、計画課題毎に問題とその対応策を導き出して計画が行われたもの
 - ・第3期の「都市イメージ活性化型」は民間活力活用の動きを背景として、民間の開発を含めた拠点整備やそのための基盤整備などの構想を、行政が民間や市民に対して提案的に提示したもの
森村道美「マスタープランと地区環境整備」学芸出版社, 1998
- 4) 第4期は「課題見直しとビジョンの共有化」とされており、それに対応した計画のあり方がある。その中であいまいなポンチ絵が役割を持たされてきたのではないかと、つまりコミュニティ計画と見てもよいのではないかと。

3 なぜポンチ化するのか

- 1) 各種の委員会などで、委員の意見、思いつきが「全部載せ」になっていく現象がある。
- 2) ポジティブに捉えたとしたら、多様性を確保するために選ばれた委員が表徴する「課題の多様さ」と「課題が次々と発見されていく状況」を擬似的に引き受けたものではないか。
- 3) 絵を描ける人も増えていく。かつては特権的なイラストレーター（ex. 真鍋博）がいたが、今やファシさん、グラレコさんが増え、表現とコミュニケーションが可能になっ

たのではないか。（ただし、グラレコが芸人より上の扱いを受けた現場をあまり見たことがない。
水森亜土っぽい扱いしか受けていない）

4 計画として機能させるには

1) コミュニティ計画の歴史：近隣住区理論（1924年、1960年ごろに再度の脚光）→コミュニティ計画（日笠端、太田実、川名吉エ衛門ほか）→札幌、神戸、高知などでの取り組み（1970年代前半）→地区計画として部分的に法制化しまちづくり条例などに位置付けられる（1980年ごろ）→地区計画から都市施設が消えゾーニングだけになっていく変化（1990年代後半）、規制緩和手法として地区計画がスポット化していく変化（2000年代後半）＝コミュニティ計画が根拠としていた「地区の全体性を踏まえたビジョン性」が失われ、機能的なツールになってしまう。

2) 政策提案制度：コミュニティ計画にかかわって登場した、問題発見から解決方法の提案までを民間に委ねる方法。世田谷のまちづくりファンドのように、住民主体に徹しサポートに徹するものと、採用されたものに一定の政策リソースが振り分けられるもの（協働型）がある。しかし、それらは得てしてプロジェクト型になってしまい、「地区の全体性を踏まえたビジョン性」の中でジャッジされることが少ない。

3) 特区制度：色々な規制がかかり創造的な取り組みができなくなっているところに、「地区の全体性を踏まえたビジョン性」を根拠として、区域を限定して規制を緩和する方法。これらも規制を緩和して建物ができたあとに、「エリアマネジメント」を動かすことがある。とはいえ、創造性はそれほど信用されておらず、東京都の場合は規制緩和のメニューに対応したショッピングリストが準備されており、単なるパズルになっているようでもある。いずれにせよ都市のごく一部でしかなく、市場性が強いところでないと成立しない。都市のその他の部分の課題を解決していない。

4) 「地区の全体性を踏まえたビジョン性」以外に根拠をどう求めるか：シビルミニマム→ベンチマークとマニフェスト：

「巨大な行政システムはあくまでもシビル・ミニマムないしナショナル・ミニマムという『必要の王国』の管理にとどまるべきである。ことに個人の内面性ないし政治活動は『自由の王国』として解放されていなければならないのである。」（松下の言）

「生活権の保障に関するナショナル・ミニマム及びシビル・ミニマムは、1970年代から2000年にいたる間に大幅に上昇し改善されてきたことは確かであるが、「シビル・ミニマムの＜量充足＞はほぼ終わった」とまでは言い切れないように思う。また、社会保障（生存権）と社会資本（共用権）の領域についてはともかく、社会保健（環境権）の領域については地球環境問題を初めとして、まだまだ深刻な課題が幅広くのこっているように感じている。」（西尾の言）

西尾勝「「シビル・ミニマムの思想」の原初の発想とその後の変貌」都市とガバナンス Vol. 31, 日本都市センター, 2019

5) KPI (Key Performance Indicators)：政策評価の必要性が2007年の「行政改革会議最終報告（総務省）」にて提起され、制度が導入されていく。政策立案時にKPIの設定が求められるようになり、政策評価時にその数値を報告しないといけない。第三者が設定しないことも多く、政策立案者によって計測可能な、安易なKPIが設定される傾向にある。とはいえ、方法は定着してしまい、EBPMとも結びつき、KPI社会になってきたとも言える。

6) ウェルビーイング：政策の目標、成果を、客観的な基準（例えば公園の整備率）に求めるのではなく、主観的な健康感、幸福感に求める方法。「幸せはそれぞれ」のはずなので、本来は健康感、幸福感は多元的であり、政策は最大多数の最大幸福を狙うか、少数多数の幸福の総和を狙うべきなのに、なぜか市町村ごとにウェルビーイングの考え方が決められる傾向にある。これはまだ定着していない。

7) 都市の課題が共通課題の量的充足（＝ナショナル・ミニマム及びシビル・ミニマム＝）から個別課題の質的改善へと向かった時に、全てが描きこまれた事前確定的な計画に替わって、ざっくりした目標と、それを計測する指標を設けて、その実現手段をあまり問わない（山の登り方は問わない）動的な計画制度が生まれた。その時に、KPIやウェルビーイング指標が組み立てられ、時にざっくりした目標の添え絵としてポンチ絵が描かれているのではないか。KPIやウェルビーイングのうち計測可能なものはスマートシティ的な環境の中で自動的に計測されるようになると思われる。

8) 計画として機能させるには、ポンチ絵の内容を、一つ一つのKPIやウェルビーイング指標に紐づけて、「地区の全体性を踏まえたビジョン性」に基づいて、KPIやウェルビーイング指標のジャッジをするということか。

5 なぜ今コミュニティ計画が必要なのか？

- 1) 市場とコミュニティのズレ。市場で大抵のものは供給されているが、供給される空間は偏在し、微妙にズレることがある。その微調整の仕組みとしてコミュニティ計画が必要。例えば香川の郊外。
- 2) 合成の誤謬。個々に事業が実現されたものの、それが地区の空間の中で隣り合い、まとまった時に、合成の誤謬を起こすことがある。
- 3) 人口減少の影響。都市空間は今は都市成長期の貯金がある状態であるが、貯金が尽きるまちもありそう。「シビル・ミニマムの＜量充足＞はほぼ終わった」のは一時的なもので、今度は格差が拡大していく可能性がある。
- 4) 公のセーフティネットの限界。民が実質的にセーフティネットを担っているが、その不調整。子ども食堂が偏ってできてしまう問題。
- 5) 新しいソーシャルミックス。所得階層と世帯の形態による意図的な混合→多様な出自による意図的な混合の手がかりとなるコミュニティ計画。

6 そのために、どういうコミュニケーションで評価をするか？

- 1) コミュニケーションには2種。言葉と絵、数字と地図。同じ言葉で誰が描いても違うのが絵、同じ数字で誰が書いても同じなのが地図。どちらかではなく、両方を組み合わせる。シビルミニマムを記述するのは数字と地図、ビジョンを記述するのは絵と言葉。ポンチ絵はもちろん絵。
- 2) KPIやウェルビーイングがいまいちつまらないのは、数字だけのコミュニケーションになっているから。反省はできても、工夫が続かないコミュニケーション。
- 3) つくる時のコミュニケーションとの連続性があるとよい。言葉による納得→ポンチ絵による納得（→数値化→地図化）→KPI的なものへの接続→計測（言葉による計測＝意識調査 絵による計測＝イメージマップ、ワークショップ）→評価
- 4) ポンチ絵を使ったコミュニケーションをもっと発達させてもよい。

7 コミュニケーション手段の状況

- 1) 言葉の状況：国民的作家や国民的詩人の不在は、大きな言葉では人を束ねられないことを意味。しかしそれは識字率の高さ（誰でも詩を書ける）、出版文化の爛熟を意味しているので、悪いことではない。
- 2) 絵の状況：識絵率も高い、自分で絵を描いたことがない人はいない。AIを使えばはるかに楽に自分のイメージを表現できるようになるのか、それともアルゴリズムでつくられる同じような絵ばかりになってしまうのか。
- 3) 数字の状況：統計のリテラシーが上がってきた？Webサービスも増えた。とはいえ、統計は単純なようでいて、結局は解釈の問題でもあるので、真面目にやればやるほど、コミュニケーションは豊かになる。
- 4) 地図の状況：誰でも地図を使える社会になった。Web-GISも充実。
- 5) メディアの状況：動画化→アーカイブ化→サブスク化→AI化。過去を振り返りやすくなったし、その時々で必要な情報を読み出せるようになった。ARやMRも安価なサービスが発達。